

富田竹二郎先生の略歴と業績

先生は、明治三十四年九月二十八日、山形県に生まれる。大正十一年三月山形県師範学校を卒業し、一年間山形市高等小学校訓導を勤める。昭和二年三月東京高等師範学校を卒業し、同年三月愛知県第一師範学校教諭となる。その後、昭和八年四月東京文理科大学教育学科に入学して昭和十一年三月卒業し、同年五月東京文理科大学助手となる。昭和十三年東京高等師範学校助手となり、同二十四年東京教育大学東京高等師範学校教授、同二十五年六月東京教育大学講師、同二十七年六月東京教育大学助教を経て、同三十四年六月東京教育大学教授となる。昭和四十年三月定年により退官するが、同年四月国学院大学教授となる。昭和四十二年三月国学院栃木短期大学の創設に参画して同大学教授となり、同五十一年三月定年により退職する。昭和六十三年五月四日老衰により死亡した。

この間、先生は、永年にわたって教育学の教育と研究に努めるとともに、東京教育大学在職中は、昭和三十一年より退官するまで大学院教育学研究科を兼務し、学生の研究指導に尽力した。

先生は、特に、教育学研究に基づいて教師教育に尽力し、すぐれた多くの教師を養成することに貢献した。愛知県第一師範学校教諭の時には、六年間にわたって教師教育の仕事に打ち込み、「躍進」という研究誌を創刊して、基本的な教育の精神と研究的態度を備えた教師を育てることに努力し、その成果をあげた。さらに、東京高等師範学校、東京文理科大学及び東京教育大学の三十年の長きにわたって、教育学の面から教師教育に熱心に取り組み、わが国の教育界を指導する人材の育成に寄与した。また図書館職員養成所の講師も長い間兼務し、図書館職員の養成にも貢献した。東京教育大学院教育学研究科においては、教育方法学の研究指導に努め、その方面で活躍するすぐれた研究者を育て、この功績は目立たないことであるが、特に大きいものがある。

先生は、東京教育大学定年退官後にも国学院大学において活躍し、特に同栃木短期大学では初代初等教育科長となり、主に小学校教師の養成において実践的経験を加えた指導に工夫を重ねて、教師教育に寄与するところが大きかった。

先生は、教育の実践を基盤にして早くから教育学の研究に従事し、特に教育方法学の研究に大きく貢献し、日

本教育方法学会及び日本視聴覚教育学会の理事を勤め、功績を残した。

先生は、教育学研究の面では次の三つのことにおいて強い貢献を果たしたと言うことができる。第一は、教育の社会的背景に早くから着眼し、教育現象の社会学的実証的な研究に寄与したことである。教育学研究においては長い間哲学的、解釈学的研究が主流を占め、教育学の規範的、思弁的傾向が強かった。先生は早くから教育の社会的影響に着眼し、それを社会学的観点から実証的に研究することに努めた。昭和二十五年『農村社会の教育』を著し、昭和二十六年「漁村及び農村中学校の長期欠席児童について」、昭和二十七年「プロジェクトメソッド成立の社会的背景」など多くのすぐれた論文を発表し、我が国の教育学研究に新しい視点を示して、研究を飛躍させる契機を与えた。

第二は、我が国の戦後の新教育の展開において学習指導の研究を進めて、その真の方向づけと具体的方策を示したことであり、この点は高く評価されている。同人は、教育方法学の研究を進め、我が国の戦後の新しい教育を支え方向づけた学習指導の理論に対して広い視野と深い眼力で批判を加えて、単に新しいのではなくて真実の、

学習指導のあり方を求めて、その具体的指針を示した。これは昭和二十七年『学習の指導』、昭和三十一年『学習指導——新教育の改善のために』などの著作に示される。これらは新教育の思想の浅薄で一面的な理解と実践に警鐘を鳴らし、我が国の教育界の実際に強い影響を及ぼした。この功績も極めて大きいものがある。

第三は、教育方法学の科学的基盤を確実にし、その質を高めるために、その基礎的研究を進め、教育方法学の地味ではあるが着実な進歩に理論的な貢献をしたことである。これは、今世紀前半に活躍したドイツの教育学者であるエッガースドルファーの青少年陶冶の理論の徹底した研究である。直観の原理と視聴覚教育、総合生活の原理と理念的統合、真理と価値の原理、郷土教育の原理などの学術論文を学会誌等に発表し、この研究の一環として昭和五十五年「青少年陶冶——授業の一般理論」という大きな訳書も著している。この研究業績は、注目され、高く評価され、西ドイツでも知られている。

国家と社会の発展にとって教育の果たす役割はいちじろしく大きなものであるが、以上のように、先生の業績は、師範学校や大学の教育学の研究とこれに基づく教育を通して多数の教育界を指導する人材を育てたこと、及

び教育方法学の基礎的研究に新しい開拓をしてそれを拡充すると共に、我が国の教育界に幾多の影響を与えたことによって、国家と社会に多大の貢献をしたものと評価される。この功績のために、先生は「従四位勲三等瑞宝章」を授与された。

（長谷川 栄）